

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

こうふこう こと

(孝不孝の事)

新版
1898
〜
1900

うえのどのごへんじ (こうふこう) こと

上野殿御返事 (孝不孝の事)

こうあん ねん

弘安3年 ('80)

がつ ち

3月8日

さい

59歳

なんじょうときみつ

南条時光

こうえのどのごきにち

そうぜんりよう

こめひと

俵

た

そうら

故上野殿御忌日の僧膳料、米一たわら、たしかに給び候

お

みほとけ

く

じがげいつかん読

い畢わんぬ。御仏に供しまいらせて、自我偈一卷よみまい

そうろう

らせ候べし。

こうよう

もう

ふこう

し

こう

知

ふこう

もう

孝養と申すは、まず不孝を知つて孝をしるべし。不孝と申

ゆうぼう

もの

ちち

う

てんらいみ

裂

はんぷ

すは、酉夢という者、父を打ちしかば、天雷身をさく。班婦

もう

もの

はは

罵

どくへびきた

吞

あじやせおう

と申せし者、母をのりしかば、毒蛇来つてのみき。阿闍世王、

ちち

殺

びやくらいびよう

ひと

はるりおう

おや

父をころせしかば、白癩病の人となりにき。波瑠璃王は親

殺

かじよう

ひい

げんしん

むけん

墮

をころせしかば、河上に火出でて、現身に無間におちにき。

たにん

殺

ためし

他人をころしたるには、いまだかくのごとくの例なし。

ふこう

おも

こうよう

くどく

大

知

不孝をもつて思うに、孝養の功德のおおきなることもしら

れたり。

げてんさんぜんよかん

たじ

ふぼ

こうよう

外典三千余卷は他事なし。ただ父母の孝養ばかりなり。

げんぜ

養

ごしよう

助

ふぼ

おん

しかれども、現世をやしないで後生をたすけず。父母の恩の

重

たいかい

げんぜ

養

ごしよう

助

おもきことは、大海のごとし。現世をやしない後生をたすけ

いったい

ざれば、一滞のごとし。

ないてんごせんよかん

たじ

こうよう

くどく

説

内典五千余卷また他事なし。ただ孝養の功德をとけるな

によらいしじゆうよねん せつきよう こうよう 似

り。しかれども、如来四十余年の説教は孝養ににたれども、

せつ 顕 こう なか ふこう

その説いまだあらわれず。孝が中の不孝なるべし。

もくれんそんじや はは がきどう く 救 にんてん

目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくいしは、わずかに人天

く 救 じようぶつ 道 入

の苦をすくいいて、いまだ成仏のみちにはいれず。釈迦如来

おんとしさんじゆう とき ちち じようぼんおう ほう と だいしか 得

は、御年三十の時、父・浄飯王に法を説いて第四果をえせ

たま はは まやぶにん おんとしさんじゆうはち とき あらかん

しめ給えり。母の摩耶夫人をば、御年二十八の時、阿羅漢

か 得 たま こうよう 似 かえ

果をえせしめ給えり。これらは孝養ににたれども、還つて

ほとけ ふこう 失 ろくどう 離

仏に不孝のとが有り。わずかに六道をばはなれしめたれど

ふぼ ようふじようぶつ どう い たま たと たいし

も、父母をば永不成仏の道に入れ給えり。譬えば、太子を

ぼんげ もの おうじよ ひつぷ 合
凡下の者となし、王女を匹夫にあわせたるがごとし。

ほとけと のたま われ すなわ けんどん だ
されば、仏説いて云わく「我は則ち慳貪に墮せん。こ

じ ふか うんぬん ほとけ ふぼ かんろ 惜
の事は不可となす」云々。仏は父母に甘露をおしみて麦の

はん あた ひと す ざげ 惜
飯を与えたる人、清み酒をおしみて濁り酒をのませたる

ふこうだいいち ひと はるりおう げんしん むけんたいじよう 墮
不孝第一の人なり。波瑠璃王のごとく現身に無間大城にお

あじやせおう そくしん びやくらいびよう 付
ち、阿闍世王のごとく即身に白癩病をもつきぬべかりし

しじゆうにねん もう ほけきよう と たま ひと めつ
が、四十二年と申せしに法華経を説き給いて、「この人は滅

ど おも しよう ねはん い か ど
度の想いを生じて、涅槃に入るといえども、彼の土におい

ほとけ ちえ もと きよう き え ふぼ
て、仏の智慧を求め、この経を聞くことを得ん」と、父母

ごこうよう

ほけきよう

と

たま

ほうじようせかい

の御孝養のために法華経を説き給いしかば、宝浄世界の

たほうぶつ

まこと

こうよう

ほとけ

讚

たま

じつぼう

しよぶつ

多宝仏も「実の孝養の仏なり」とほめ給い、十方の諸仏も

集

いつさいしよぶつ

なか

こうようだいいち

ほとけ

さだ

あつまりて、「一切諸仏の中には孝養第一の仏なり」と定め

たてまつ

奉りき。

あん

にほんこく

ひと

みな

ふこう

じん

これをもつて案ずるに、日本国の人は皆、不孝の仁ぞか

ねはんぎよう

もん

ふこう

もの

だいちみじん

おお

と

し。涅槃経の文に、「不孝の者は大地微塵よりも多し」と説

たま

てん

にちがつ

はちまんしせん

しゆう

おのおの

怒

き給えり。されば、天の日月、八万四千の星、各いかり

まなこ

怒

にほんこく

睨

たも

いま

をなし、眼をいからかして日本国をにらめ給う。今の

おんみようじ

てんぺんしき

そう

もう

ちよう

ひび

陰陽師の「天変頻りなり」と奏し申す、これなり。地天、日々

お 起こって たいかい うえ しょうせん 浮
に ほんこく しょうに たましい 失
日本国の、小児は 魄 をうしない、女人は 血を はく、これ 吐
なり。

きへん にほんこくだいいち こうよう ひと ぼんてん たいしやく 降 くだ
貴辺は 日本国 第一の 孝養の 人なり。 梵天・帝釈 おり下つ

そう はね しほう ちじん あし 戴 ぶぼ
て 左右の 羽となり、 四方の 地神は 足を いただいて 父母と

仰 たも ことおお 止 そうら お
あ おぎ 給うらん。 事多しといえども、とどめ 候い 畢わんぬ。

きようきようきんげん

恐々 謹言。

こうあんさんねんさんがつようか

弘安三年三月八日

しんじょう うえのどのごへんじ

進上 上野殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押